

みんなで語り合い、考える「これからの学校」
talk and think about
future school

テーマ

オンライン授業

リレー形式で深めます

01

話題提供者
「三四郎の学校」
事務局長
日賀優一

ひが・ゆういち 「答えが1つではない問い」を考える中高生向け対話型ワークショップを主催する「三四郎の学校」事務局長。本誌2016年6月号で紹介した長崎県立諫早高校での取り組みを始め、高校教師や社会教育従事者などを対象とした学びの場づくりにも携わる。また、2019年3月にVIEW21編集部が主催したワークショップ「生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント」の監修者の1人。

オンライン授業における「学びの燃料」

急速に広がっていくことが予測されるオンライン授業。そのよりよいあり方についてリレー形式で深めていきます。第1回目は、学習者である生徒や学生の声をヒントに考えます。

高校生、大学生が語る
オンライン授業の課題

私は、福岡県を中心に中学生や高校生を対象とした対話のワークショップを行う「三四郎の学校」の事務局長を務めています。2015年からは長崎県立諫早高校で、高校生が企画・運営する対話の場「グローバル講演会」のサポートを行っており、その内容は、ベネッセ教育総合研究所が発行する『VIEW21』高校版でも紹介していただきました(2016年6月号)。また、同誌で17年6月号から20年2月号まで連載された「これからの会議・研修のあり方・つくり方」で、監修者の1人として同コーナーにかかわらせていただきました。

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、3月から全国の多くの高校が臨時休業となりましたが、以来、「三四郎の学校」や「グローバル講演会」に参加してきた高校生や大学生と、「これからの授業」「高校生に必要なこれからの対話」について話し合ってきました。その中で、彼らが語った「学習者として感じる、オンライン授業の課題」は、今後オンライン授業に取り組みされる先生方に参考にしていただける点もあると考え、ご紹介させていただきます。

学んでいるのは自分だけ？
分からないのも自分だけ？

オンライン授業に対する感想を高校生や大学生に聞いて、特に印象に残ったのは、「一緒に学んでいる仲間の存在感」の大切さを指摘する声でした。例えば、次のような発言です。

「オンライン授業で一番気になるのは、気軽に質問できないこと。先生が説明している時に途中で質問しにくいだけでなく、今、授業が分かっていないのは、もしかすると自分だけかもしれないという不安がとても大きい。自分が聞きたいことは、どのタイミングで聞くのが適切なのか、オンラインでは分かりにくい」

実際の教室での授業では、周りの生徒や学生の表情、時にはため息などで、その授業を受けている生徒や学生のどのくらいが分かっているのか、今、先生の説明を止めてでも質問した方がよいのかを判断していたと、彼らは振り返ります。そうした、ともに学んでいる場の一体感がないことに違和感を覚えるという声が多くありませんでした。ある大学生は、「授業中、教授の指示でカメラもマイクもオフにして問題を解いている時、ふと、この授業を自分以外の人もちゃんと受けているのかと不安になることがある」と打ち明けてくれました。

お互いの学びの手応えを
感じ取る「間」が欲しい

オンライン授業で実際の教室同様の一体感を醸し出すことは困難です。では、どうすればよいと思うか、彼らに尋ねました。彼らが提案したのは、「間(ま)をつくる」ことです。ある大学生は、「高校の時は、先生が板書している間に1人で考えたり、隣の人に聞いたりすることで理解が進んでいたと思う。それから、授業と授業の合間の休み時間にもよく友人に質問していた。そういった間が必要ではないか」と言いました。別の大学生は、「そういえば高校時代、定期テストが近くなるほど休み時間に、勉強に関する話をすることが増えていった」と、懐かしそうに振り返りました。オンライン授業においても、授業中のちょっとした間、授業と授業の合間をつくり、生徒同士が学習したことについて語る時間を少しでも設けてはどうかというわけです。オンライン授業が終わってすぐに全員が接続を切るのではなく、先生だけが先に退室した後、生徒だけで感想を話し合う時間をつくるのも一案でしょう。

ある大学生は、「自分が在籍した高校では、授業中、先生の説明に対して生徒が意見や質問をし始め、収拾がつかなくなるほど盛り上がることを『炎上』と呼んでいたが、『炎上』が頻発した学年は、入試でも成果を上げると言われていた」と話してくれました。オンライン授業において、生徒同士で自ら学びの燃料をつくり出す間をどのようにつくっていくか、考えてみる価値のある提案ではないでしょうか。